

高月集 (第十三輯) (上)

兼題 夏めく
夏めくや竹の古柴のさ
夏めくや高く懸をぬく
の如く 霧 宿 宿
燈をいれて夏めく庭や石
夏めくや土手に炎の花
夏めくや夜店に並ぶ花
夏めくや立つ海
夏めくや林泉に湧く微風
夏めくやひびく窓の音
夏めくや温泉の町に入
旅役者 天 仙
燈の町はや夏めくさし
箱庭に夏めく苦の匂ひ
な 霧 宿 宿
同 浴衣 霧 宿 宿
浴衣着てしのびゆりた
らがどの 開 月
高欄の燈水涼し白浴衣
大銀杏切つて氣安き浴衣
かな 萬 袋
若返る古き夫婦の浴衣
な 一 夢
校島に遊覧船の浴衣かな
同 霧 宿 宿
に揃ひの浴衣美しなつ参
り 霧 宿 宿
初浴衣母のなげき思ひ
り 霧 宿 宿
よく衣着て清き心や軽き
足 開 月
酔うて一人不城に入る
く衣かな 天 仙
任をへてよく衣に軽き心
かな 霧 宿 宿
よく衣着の女美し夕明
鈴蘭の模様艶やかに衣
温泉の町の夕照は白
く衣 江 亭

恩になつた、米と一口に随分の爲めには涙の種
言ふが文字通り米や糠を先となることもあるんぢや
生の臺所から貰つて来る。「して、父さん、それか
ともあつた、先生はもうごら話はどうなりました
うに奥さんをなされてゐる「うむ、それからその當
たが、一粒種のお静さんとの先生の心配と云ふものは
いふ娘御が居られて、後に實際、ハタで見て居られぬ
も前にも肉身は其の娘御だ位ぢやつた、何故といつて
ひだつた、ところが、其先生がこの人を指して他に
の娘御が年頃になつて先生に取替はるのやうに考へた
は先生の考へて三國一の婿婿がねを取替はるに済ま
金を見付けたわけであつたすに……その男と取り交
が静さんの方に親御の約束を履行するには、
静さんは或る繪の塾に通つて居るからなつたので、つ
て居られる間に……同門りどう考へても静さんの
のながしと云ふ青年と想腹の子はすつかり隠して
思の仲になつてゐたのぢや……結婚前に秘密に生み落
で現在でも復讐してしまつてしまつて、知らぬ顔
た有馬博士が川本家へ入婿で有馬の嫁にするより外は
前には當然死ぬの、生きているなかつたので、其の外に
なかつたので、其の外に
方はないと考へて先生は
休むに其の方法を知つた
の、その間の消息を知つた
た、その間の消息を知つた
た、その間の消息を知つた
た、その間の消息を知つた



死を起す者
三上於菟吉作
布施平八郎書
(25) 二十四年前 (三)
「そしてその時、この父は

十八、故郷を出た初めての出産は許される筈はな
た俺はずつと川本先生の玄かつた、でどう若い同志
の學問はさせて頂いたが、此處に困つた
の年輩になつてもまだ志をたはお静さんか身重になつ
まだ辯護士の試験も通るこに話をするところ、
務が出来ずに新花町に小、こゝにあるのぢや」
八は言葉を切つた
借家生活をして先生の事
を所へ通つてゐた、家内は
家内漸く乳はなれた、した
嬢をあやしむが、静子の箱
を張つたり、その頃嬢草
といふ内職があつてそんな
身震ひがガク／＼と總身を
襲つて来た
「静子はこれからぢや、
新して話をして見れば俺も

大和田醫院
平町南町
電話一七〇番

利末廣

正改片濱乗合自動車時間表

五時三十分	平のりば
五時三十分	四丁目和泉屋前
五時三十分	新川町車庫
七時三十分	江名のりば
七時三十分	沖見屋
九時三十分	松屋
十一時三十分	江名
十二時三十分	松屋
二時三十分	沖見屋
四時三十分	松屋
六時三十分	江名

鈴木片濱自動車部
電話一四二七
車庫時出 電話一四二七

植田町本町
前田醫院
入院隨時……電一二四番

たひら正宗 福島縣清酒品評會一等賞受領
花 春 優等賞受領
醬油醸造元
山崎合名會社
電話一〇番

診療開始
耳鼻咽喉科専門 鈴木正男
日本醫大醫學士院長
齒科口腔外科 高橋正永
日本齒科醫學士科長
◎晝夜診療
下谷區入谷町二九一
入谷改正通り東交番前六開通り

外科 花柳科
婦人科 産科
内光線科
赤心堂病院
町田町平 (五七四電)

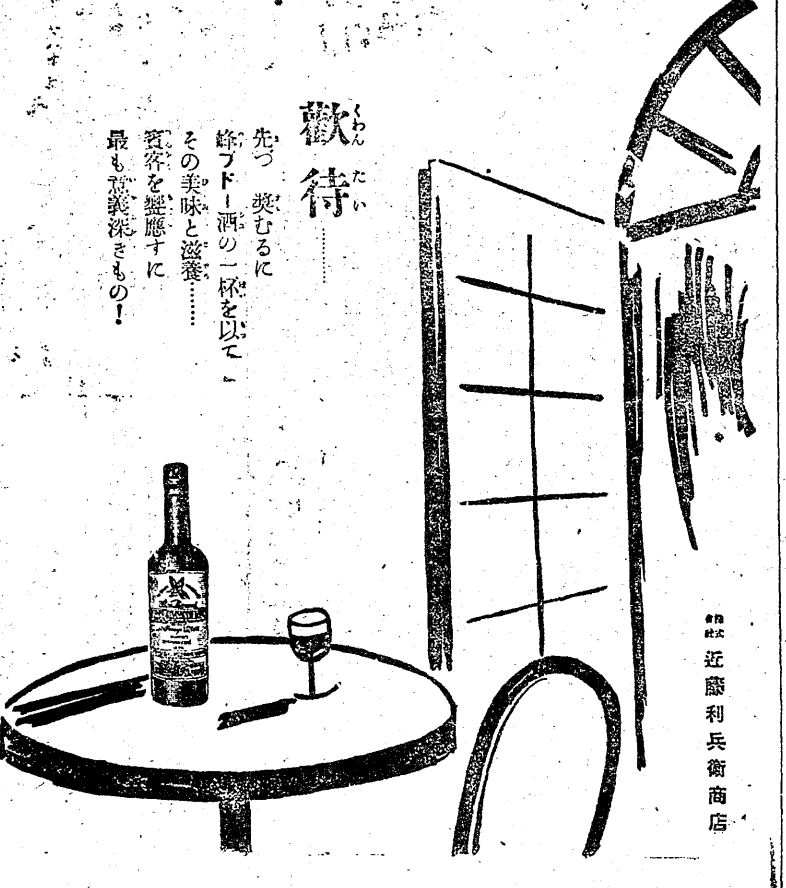
夜間診療
腸胃科 専門
皮膚科 専門
院醫科腸胃性村松
(番七〇一話電町南平)

緑したる初夏!!
かろく涼しく 丈夫な白靴
△弊店獨特……白革底
自製品B……七、〇〇〇
靴の御用は……形ト仕事ト
—安價デ……確實な—
平 田 町
大塚支店製靴部へ
電話七〇二番

内科、小兒科 入院應需
藤沼醫院
電話平 〇五〇七番

小供洋服生地
今夏の新柄が
深山揃ひました
相かはらず
御用命の程
達用御校學女各
町田町平
店糸ヤトモシハ

元禄
大販賣店 山野邊藥局
平町五丁目角



蜂ブドウ酒
「蜂印」
先づ 爽むるに
蜂ブドウ酒の一杯を以て
その美味と滋養……
賓客を饗應すに
最も 適宜な酒!

